
電話

伊東歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電話

【ZZード】

ZZ9878

【作者名】

伊東歩

【あらすじ】

夜中にかかってきた一本の電話。その相手は、未来からかけた私の子供だという。

RRR・・

「ん、んん。何よ、んな夜中こ、2時半?」

RRR・・

「もへ、はいもじもし?」

「わしわし、綾野加奈子さんですか?」

「わいですよ。12月の向元の用?」

「あ、そつねは夜中なんだ。申し訳ない。」

「わいわいて、国際電話でも掛けてるの?」

「こや、日本だよ。12月は毎回だね。」

「くへ、最近は国内でも時差があるのね。勉強になつたわ。じやああよんながい。」

「いた電じやない。聞いて欲しこりがあるんだ。」

「違ひよ、いた電じやない。聞こて欲しこりがあるんだ。」

「違ひよ、いた電じやない。聞こて欲しこりがあるんだ。」

「「」こんな夜中」」?

「それは本当に申し訳ない。」

「申し訳ないと思つなら切つていい?」

「これなりで悪いけど聞いて。実は、」

「実は、何?」

「実は、お願いがある。子供を、堕ろして欲しいんだ。」

「あら、素敵な言葉。検討します。じゃあね。」

「待つて待つて!」

「あのね、いたずらでももづかよつと考えてやつたら、もししくはリサーチするとかさ。私は妊娠はもううん、結婚もしてないの。それでなにを堕ろせつてのよ。」

「それは分かつてる。」

「あ、あ。じゃあもう満足かしら?」

「だからいたずらじやないんだつてば。今付き合つて長い彼氏がいるでしょ!」

「ああ、賢ちやん。」

「ああ、その人と結婚するんだ。妊娠を機に。」

「出来ちゃった結婚？別にいいけど予告されたんか微妙ね。」

「そして俺が産まれた。」

「……は？」「めん、よく聞こえなかつたわ。何て？」

「だから、俺はあなたの子供なんだよ。そつちから見ればいわゆる未来から掛けてるってことになる。」

「……もつ3時前だわ。そろそろいいかしら？」

「待つてくれよ。切られたらきつともう一度と繋がらない。今こうして話せてること自体奇跡みたいなもんなんだから。」

「そりゃあ、君が本当に私の子供だったり、この電話は奇跡以外の何ものでもないわね。」

「まあ信じてくれって方が無理だと想つ。でもどうあえず電話は切らさずに話を聞いて欲しいんだ。」

「はあ。まあ幸い明日は休みだし、ちょっとくらいは付き合つたげる。あとで変に恨まれてもイヤだ

し。」

「よかつた。」

「で、さつかも言つてたわね、子供を堕ろしてくれって。どういう意味？」

「そのままの意味だ。あなたが結婚する一つのきっかけとなつた妊娠、それはいい。でも、その子を産んじゃいけないんだ。」

「意味分かんないんだけど。何で産んじゃダメなのよ？出来ちゃつた結婚しました、でも子供は墮ろしますって？笑えないジョークね。」

「死んじゃうんだ。」

「え？」

「あなたは、その子供を生んだ直後、息を引き取る。」

「・・・出産で命を落とした女性が何百人、何千人、何万人もいる。」
「そうとうな難産だつたつて聞いてる。何十時間も掛かつて、母子ともに危険な状態までいつて。命からがら子供だけ助かつた。」

「忠告ありがと、気をつけろわ。」

「ちゃんと聞いてくれ、母さん。」

「母さんは止めて。まだ妊娠すらしてないっての。」

「ああ、せうか。」

「ちよつと待つてよ、君さつき私の子供だつて名乗つたわよね。」

「ひとつは、墮胎してしまった子供を産むこと。つーじ。」

「俺だよ。俺を墮胎してほしかったんだ。」

「俺を墮胎せつて、変なヤツ。」

「やつすればあなたは死ななくすむ。」

「なんで自分を墮胎せねば今まで助けようとするの?..」

「俺は、母さんが好きだ。」

「産まれてまもなく死んだ母が好きつて?..」

「父さんが家にたくさん母さんの眞實を飾つてた。ビデオもよく観せててくれたよ。子供の俺が眞実の変だけど、母さんは明るくて、いつも笑つていて、とても綺麗だった。父さんはよく母さんの話をしてくれた。」

「君の話を信用するなら、お父さんて賢いやんの?..」

「やつ、ビデオでもそつ呼んでたね。」

「やつか、賢ひやんは私の話をしてたか。よし、明日寝めいやがつと。そうだ、水を差すよつて悪いけど、一ついかしら。」

「何?..」

「賢ちゃんは、お父さんは今近くにいないの？変わってくれれば君の話を信用してあげられると思つんだけどなあ。」

「やうだね、是非僕も変わつてあげたい。父さん喜んだらう。でも、もう無理だ。父さんは、もうこの世にはいない。」

「え、賢ちゃんが？ 何でよ？ 事故か何か？」

「一年半くらい経つかな？ 過労で、倒れた。」

「過労？ あの賢ちゃんが？ まさか、いつも言つちやなんだけど、あまり自分に厳しい人間じゃないよ、彼。」

「俺は昔の父さんは知らない。俺が知る父さんはいつも良い父親で、家のことも、炊事洗濯もちゃんとこなす良い母親でもあった。」

「あの賢ちゃんがねえ。どうも信じがたいわ。」

「今は信じられないけど思つ。でも、いつかは分かつて欲しい。俺が産まれてしまつ前に。父さんはよくお礼を言つていた。俺がちょっと手伝いをしただけでも、すごく褒めてくれた。そして何度もありがとうって言つてくれた。俺はそんな父さんが好きだった。だから、父さんに死んでしまうほどの苦労をかけたくないんだ。そのためには、母さんが生きてなきゃ駄目

なんだよ。だから、母さんが生きるために、俺を産まないでくれ。お願ひだ。」

「お父さんは、最期に何か言っていた?」

「死に直には立ち会えなかつた。連絡があつてすぐ駆けつけたけど・
・」

「・・・私もさあ、幼くしてお母さんと死別してんだよな。」

「知つてゐる。」

「やう。それでね、母の愛つてものをよく分からぬまま育つた。
お父さんにいつか聞いたんだよね。お母さんて昔から体が弱かつたんだって。出産は難しいでしょうって
お医者さんからも言われてたらし。」
でも、お母さんは私を産んだ。そのせいで死期を早めちやつたんだ
らうね。別にお父さんは私を責めるつ
もりでこんなことを言つたんぢやないと想ひ。でも、實際、私には
その話は重荷以外の何物でもなかつ
た。自分のせいで母は死んでしまつたんだって、ずっと、それこそ
10年以上そう思つてた。」

「・・・俺と一緒に。」

「そつか、君も重荷に感じてるんだ。そつよね、子供からしてみればそんのお涙ちょうだいの良いお話
なんて思えるはずないよね。私が覚えてるお母さんつて、いつも床
に伏せて、時々乾いた咳をして、そん
な苦しそうなイメージしか残つてなかつた。親元を離れて5年くら

い経つた頃かな？休暇で久しぶりに実家に帰ったの。その時、掃除してたらこれが出てきたって、お父さんが一冊の日記を出してきたの。小さい頃見た記憶があるそれは、弱つてたお母さんがお父さんに頼んで買つてきてもらつた日記だつた。最期だからつてすゞい上等なものを頼むつて言われてたが、お父さんは懐かしそうに聴いた。確かに、十何年も経つてゐるのにその日記は全然色あせてなくて、しつかりした。」

「・・・その日記には何で？」

「毎ページに細かい字でびつしり書いてたよ。つて言つてもまあまとんび寝たきりみたいな生活だし内容はお父さんに対する感謝とか、私が元気で育つてくれて嬉しい、みたいことばつかりだつた。でね、それをぱらぱら捲つてたら、あるページで、手が止まつた。今まで綺麗な字で埋め尽くされてたそれが、不意になくなつたの。まあ、つまり、その日記になくなつたつて、ことなんだよね。その最期のページには、前のとは比べ物にならないほど、震えた、乱れた字で、一言『正樹さん、加奈子、ありがとう』つて。

「あ、ありがとう・・・？」

「わ、まあ、お父さんは分かるよ。毎昼夜看病してた、感謝されるのはもちろんのことだと思つ。でもお母さんは私にもありがとうつて。何もしてないのこれ。私の名前書かなきやもつと綺麗な字でお父さんに感謝の言葉書けただろうつ。何してたのよ、無理しないでよ、

そんなこと思つた。その後慌てて口元を閉じたよ。涙で滲ませちゃいけないって。私のせいでお母さんが死んでしまつたなんて重荷はいつの間にか感じなくなつてた。」「

「・・・父さん、最期に看護婦さんに俺宛の伝言を残してた。」

「何て?」

「『母さんも言つてた』って。」

「母さんも?」

「父さんはよく本を読んだ。だからいつもかっこつけて、回つづべき言い方したんだ。さつき言つたる? 父さんはよく俺にありがとうつて言つてたつて。母さんもいつも言つてたつて、俺に言つたかったんだ。」

「そつか。私、言つたんだ、わが子にありがとうつて。まあ君の話を信用すれば、つて話だけどね、ふふ。」

「その笑い方、ビデオでよく見た。俺好きだよ。母さんのその笑い方。」

「母さんは止めてつてば。信用したとは言つてないよ。でもさ、君もそれを聞いたんなら、はじめから思つてたんじゃないの? 塌ろしてくれなんて言つても、母親の気持ちは変えられないって。」「

「・・もしかしたら、声が聞きたかっただけかも。でもちゃんと俺の話を聞いて欲しかったんだ。」

「そっか。」

「そりそり切るよ。夜中にじめんね、それじゃあ。」

「うそ、じゃあね。おやすみ。それと、ありがとう。」

「・・その言葉、直接聞けてよかったです。じゃあ、おやすみなさい。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n98781/>

電話

2010年12月8日15時30分発行